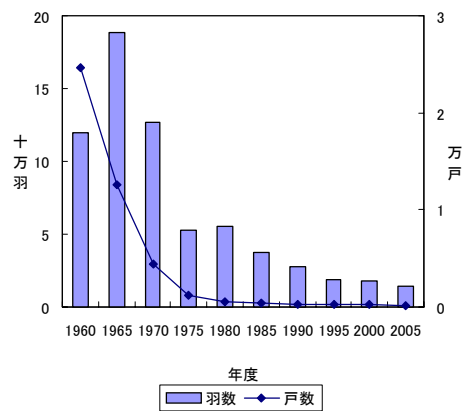


4 養鶏

東京都で、養鶏が産業として発展してきたのは比較的新しく、大正時代に入ってからで、それ以前は、農家の庭先養鶏が主流でした。大消費地の中での生産という地の利を得ていたことから発展してきましたが、昭和40年(1965)をピークにその後は減少傾向にあります。

【採卵鶏飼養羽数と農家戸数の推移】

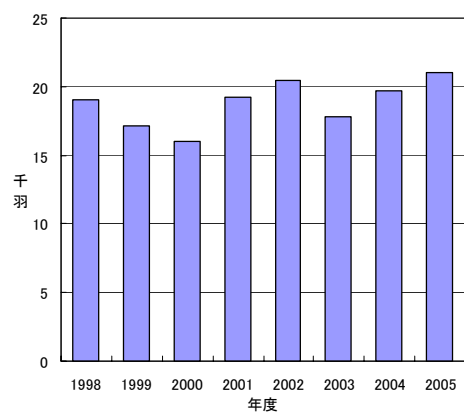


○これまでの取組と生産の特徴

都内の採卵鶏飼養農家の多くは、規模は小さいながらも、直売や小売店等への販売を中心に、東京の立地条件を活かした経営を行っています。

また、肉用鶏では、ブロイラー※74は皆無でしたが、旧畜産試験場(現農林総合研究センター)で改良された「東京しゃも」は、鶏肉専門店や料理店等に根強い人気があり、昭和58年(1983)から生産されています。

【東京しゃも出荷羽数の推移】



また、同様に改良された「東京うこっけい」は、平成4年(1992)頃から従来の養鶏農家以外でも、直売用に飼育する人が増えています。

都内の養鶏農家は、安全性や鮮度等を求める消費者の声に敏感に反応し、対応する必要があります。また、最近では、高病原性鳥インフルエンザに対する、養鶏農家の防疫対策だけでなく、消費者への正しい情報提供等も求められています。

○課題

- ・家畜伝染病(高病原性鳥インフルエンザ対策等)の、衛生面や風評被害等についての対応が求められおり、生産者と消費者の信頼関係を深める、双方向コミュニケーションが必要です。
- ・鶏ふんの適正な処理と利用の、一層の推進が求められます。
- ・「東京うこっけい」の飼養農家の組織化を推進し、地域での特産化が求められています。
- ・「東京しゃも」の安定供給と、食肉処理方法の改善が求められています。
- ・島しょで地産地消が可能な、肉用鶏の導入が期待されています。

○取り組むべき具体的内容

- ・家畜伝染病(高病原性鳥インフルエンザ等)対策として、積極的に養鶏農家から情報収集につとめ、関係部署との協力体制を充実します。また、生産段階における飼養・衛生管理指導の充実強化を図ります。さらに、インターネット等を活用した消費者への適切な情報提供等を推進します。
- ・鶏ふんの処理施設を改善し、利用促進を図ります。また、生産性を向上させるため、鶏舎、施設の改善を推進します。
- ・東京うこっけい卵生産農家の既存組織の集団化を進めます。
- ・アシタバ等地域特産物を使った東京うこっけいの卵の生産と、機能性の向上のための研究をすすめ、飼養を促進します。
- ・「東京しゃも」の指定飼料の改善による品質向上、生産流通における衛生管理体制の強化を図ります。また、3万羽出荷体制を目指し、ふ化・育成率^{※75}の向上を図るとともに食鳥処理の施設や方法についても改善をすすめます。
- ・御蔵島・青ヶ島等をはじめとした島しょ地域に自給利用や民宿での利用を目的として、「島しゃも」の導入を図ります。

○今後の計画

- ◇機能性成分研究…平成19年度まで機能性成分研究を実施
- ◇東京しゃもの増産…平成20年度に3万羽出荷体制を実現
- ◇島しゃも…試験を開始